

## ベンノ・オーネゾルクの新たな追悼に向けて

### — シュタージ文書の発見・ウーヴェ・ティムの 『友と異邦人』・ドイツの“68年”と暴力 —

副 島 美由紀

#### 1. 重要なシュタージ文書の発見

2009年5月23日はドイツ連邦共和国の憲法にあたる基本法の発効60周年を記念する日であった。記念日の前日である5月22日には、ベルリン大聖堂で連邦首相や大統領が出席して基本法記念の特別ミサが行われた。従ってその夜のドイツ第二放送のニュース番組である「今日 (heute)」のインターネット版や、その翌日の憲法発効記念日の主要な新聞、例えば「フランクフルター・アルゲマイネ紙」の学芸欄では、ホルスト・ケーラー大統領によるミサでの映像や演説内容が紹介されてもよいはずだった。しかしこれらのトップ画面、または紙面を埋めていたのは、21日に発表された報道、つまり1967年6月2日に西ベルリンで起きたイラン国王訪独反対デモの際にベルリン自由大学の学生であったベンノ・オーネゾルク(Benno Ohnesorg)を射殺した警官が、実は東独のシュタージ(Stasi=国家保安省)のスパイだったというニュース<sup>1</sup>の続報であった。オーネゾルクが射殺された日であるこの1967年6月2日という日付は、ドイツの学生運動の発火点として「共和国を変えてしまった日」、あるいは終戦時の表現に倣って「零時(Stunde Null)」とさえ呼ばれ、ドイツの現代史においては忘れることのできない歴史を画した日である。そして過失致死罪に問われた警官のカール・ハインツ・クラス(Karl-Heinz Kurras)が証拠不十分を理由に一審、二審ともに無罪判決を受けたことにより、若者たちの法治国家に対する信頼が失われたと言われている。この日の衝撃を契機として一気に加熱した学生運動は西ドイツの資本主義体制やその“エスタブリッシュメント”に抗議しようとしていただけに、オーネゾルクの殺害者が実は東側に奉仕する共産主義者だったという新事実は、ドイツの社会にとって基本法記念日を忘れさせるほど大きな衝撃であったように見えた<sup>2</sup>。

しかもこの報道内容は、疑う余地のない事実であるらしかった。シュタージ資料の研究所である「ビルトラー機関」で、オーネゾルクを射殺した警官であるカール・ハインツ・クラスがドイツ社会主義統一党(SED)の党員であったことを証す党員証と、シュタージのスパイとしての宣誓書および活動の記録が発見されたのである<sup>3</sup>。そしてクラス本人もメディアの取材に対し、その内容を概ね認めた<sup>4</sup>。

この報道を受けて自由民主党(FDP)は、1949年以降の連邦議会議員全員のシュタージとの関係を改めて調査すべきだという要求を連邦議会に提出したが、その提案は他党の反対にあって否決された<sup>5</sup>。またこのような重要な発見を今になって行ったという「ビルトラー機関」の非効率的な研究方法も非難的となった<sup>6</sup>。ともあれ、殺人罪に時効のないドイツでは「スターリニズムの被害者連合」の副会長を原告としてクラスに対する殺人罪の再審要求が提出され<sup>7</sup>、連邦検事局もクラスの訴追の可能性を調査中だと言う<sup>8</sup>。

折しも前年の2008年は“68年”の40周年にあたり、“68年運動”、あるいは短く“68年”と呼ばれる現象<sup>9</sup>に関する関心の再燃が起こっていた。何冊もの注目すべき新書が出版され、ドイツ赤軍(RAF)に関する映画である「バーダー・マインホーフ・コンプレックス」<sup>10</sup>が公開されて

2009年のアカデミー外国語映画賞のドイツ代表候補作品にもなった<sup>11</sup>。その前年の2007年に40周年を迎えたオーネゾルク事件についても、ジャーナリストのU.ズークブによる『ベンノ・オーネゾルクは如何にして死んだか?』<sup>12</sup>という綿密な調査書が出版されている。同じ2007年にRAFのメンバーで終身刑を宣告されたクリスティアン・クラール受刑者の恩赦問題が話題になり、結局彼が刑期終了前の2009年1月に保護観察付きの釈放措置を受けたことから、そのことの是非も議論の対象となった。よって“68年”は近年新たにメディアの関心と学問的研究の対象となっているのである。

もちろん“68年”に関する論争は以前にも行われていた。1998年に誕生した連立政権では68年世代が重要な役割<sup>13</sup>を担うようになり、外務大臣となったヨシユカ・フィッシャーのテロリズムとのかつての関わりが問題視された<sup>14</sup>。また、学生運動の指導者であったルディ・ドゥチュケと暴力に関わる2005年頃の議論もあった<sup>15</sup>。今回のオーネゾルク殺害に関するシュタージ文書の発見は、“68年”の回顧がG.ケーネンが言うような「湿っぽい“思い出文化(Erinnerungskultur)”の対象」<sup>16</sup>などではなく、未だに疑問の多い、そして今後も「いっそう激しく議論されていくことが予想される」<sup>17</sup>“過ぎ去ろうとしない過去”であることを改めて認識させるものであった。

## 2. 犠牲者側の声

以上のような論争に関しては、日本では井関正久の一連の労作<sup>18</sup>によって知ることができるが、筆者の眼を惹いているのは、テロリストたち自身と同様に従来沈黙しがちであったテロリズムの犠牲者の周辺から近年発せられる声、あるいは彼らを追悼するための動きである。例えば1967年6月2日のデモの現場となったドイツ・オペラ座近くの広場を「ベンノ・オーネゾルク広場」と命名しようとする2005年の地区議会の提案や<sup>19</sup>、ドゥチュケ狙撃事件の直後に大規模な抗議行動の対象となったシュプリングー社の一画がルディ・ドゥチュケ通りと改名された事実等である。2007年の6月2日の記念日には、ベルリンの警視長官が初めてオーネゾルク記念碑に花束を手向けるという出来事もあった<sup>20</sup>。同じく2007年には『RAFにとって彼はシステムだった、私にとっては父親だった』<sup>21</sup>という本も出版された。RAFのテロ活動により死亡した犠牲者の家族の声を集めたものであるが、多くは彼らに対する初めてのインタビューから成っている<sup>22</sup>。また、かつて雑誌「シュピーゲル」の編集者を務めたジャーナリストのカロリーヌ・エムケは、2008年に『声なき暴力』<sup>23</sup>を著している。エムケにとってRAFの第三世代に殺害されたドイツ銀行頭取のアルフレート・ヘアハウゼンは代父とも言える近い存在であった。事件の直後彼女はヘアハウゼン家に居り、未だに特定されていない犯人からの犯行声明の電話を自ら受け取っている。『声なき暴力』は世論に対してRAFに関わる議論の際に感情過多になることを戒め、またRAFのかつてのメンバーに対しては、沈黙から脱して冷静に事件について語ることを要求している。同じくRAFに殺害された連邦検事総長、ジークフリート・ブーバックの息子であるミヒャエル・ブーバックは、2008年の著書『父の二度目の死』<sup>24</sup>の中で、殺害の実行犯を特定したという1985年の判決に対して疑義を呈し、真相の究明を求めている。このような書物が最近になって世に出ているという事実は、彼らが痛みを克服して公の場で語れるようになるまで、これ程の時間を要したということをも物語っている。

そしてベンノ・オーネゾルクの追悼エッセイとして2005年に出版されたのが、ウーヴェ・ティム(Uwe Timm)による『友と異邦人』<sup>25</sup>である。ティムの名は日本では学生運動の体験を描いた『暑い夏』<sup>26</sup>や、『カレーソーセージをめぐるレーナの物語』<sup>27</sup>の著者として時折語られたりする

のみであるが、ドイツ本国での彼は68年世代中の「最も重要な作家の一人」<sup>28</sup>として評価されている。そして彼は大学進学前のオーネゾルクの親友であった。オーネゾルク事件については『暑い夏』においても短い言及があるが、個人的な関係については明かされていない。ティムも最初の追悼文執筆の試みからその完成までに約40年の時間を要した。新事実の発見によって再びオーネゾルク事件に関心が寄せられている現在、この追悼エッセイの内容を紹介しながら“68年”の暴力に関する議論に一考察を加えてみるのが、本論の目的である。

### 3. 友、そして『異邦人』

ウーヴェ・ティムとベンノ・オーネゾルクは、ルディ・ドゥチュケと同じく1940年に生まれた。ティムはハンブルク、オーネゾルクはハノーファーの出身であったが、二人とも家庭の経済事情のためギムナジウムには進学せず、職業訓練の道に進んだ。しかし大学進学を望んでいた二人はその後ブラウンシュヴァイクの補習高等専門学校に入学し、そこで出会っている。1961年4月のことであった。補習高等専門学校というのは本来第二次大戦後の復員兵のために作られたもので、何らかの理由で大学進学を果たせず、その代わりにきちんと職業訓練課程を終えた者たちに2年間の一般教育を施して大学入学資格を取得させるための教育機関である。当時の補習専門学校は現在のそれとは違い、真に知的才能のある若者だけを集めて国のエリートに育てるという目的があり、入学試験も数日を費やして心理テストや面接を行う大がかりなもので、倍率も高かった。が、合格者には奨学金が与えられ、全寮制の学校で勉学に集中できる好待遇が待っていた。それまでに従事していた職業が美的センスに関わるものだった―ティムは毛皮服の裁縫師、オーネゾルクはショウウィンドウの装飾師であった―という共通点と、文学に対する強い関心が接点となり、二人は親しい友人関係を育むことになる。が、大学進学後数年たったある日、パリに留学していたティムは、アパートのラジオから突然オーネゾルクの死のニュースを聞く。最初の悲しみの衝撃が治まった後、彼はオーネゾルクの追悼文を書こうとしたが、怒りや憎しみや憤慨の波に襲われ、その文章は形式張った熱弁調になり、攻撃的で政治的な調子を帯びた。そしてそれこそがオーネゾルクに似つかわしくない文体であった。最初の試みは中断するしかなかった。その後事件に関するメディアの様子を見て彼が気づいたのは、この大きなスキャンダルに関する多くの論評、議論、解説、報告、政治的発言等がなされるにつれ、国中にその名が知られ、大きな政治的聖画像<sup>イコノ</sup>となってしまったオーネゾルクを、実は個人として追悼することが不可能になってしまったという事実である。それならばなおのこと、個人としてのオーネゾルクについて書くということが自分の義務であるようにティムには思われた。「彼らが殺害したのがどんな人物だったのか、自分たちから永遠に失われてしまったのが誰だったのかを全ての人々に知らしめたい(F12)」と彼は思った。しかしそれは容易なことではなかった。何度かの失敗の後、様々な体験や思考や挙動についてのイメージが結晶のように自ずと育って来なければ、そして自分自身についても書かなければ、この試みは成功しないということをティムは悟る。それから彼はオーネゾルクの兄弟たち、ベルリンでの友人たち、彼の遺児である息子のルーカス、また撃たれて横たわる彼を介抱しようとする写真によって有名になったフリデリーケ・ハウスマンらに会って題材を集め、時が熟すのを待った。こうして事件から38年を経てようやく完成した『友と異邦人』は、オーネゾルクとティム自身、そして彼らの世代についての物語となったのである。

“友”であるオーネゾルクとティムは、出会った当時既に文学の創作を試みており、将来“物書き”になりたいと考えていた。二人は「タイルス・タイルス(teils-teils)<sup>29</sup>」という同人誌を作り、

自作の詩やエッセイを載せた。作品を実名で発表し、友人の意見を聞いて作品を改作することを楽しみ、また演劇クラブを作ってイヨネスコやベケットの作品を上演していた外向的なティムとは違い、控えめで内向的だったオーネゾルクは同人誌でも匿名を使い、詩を書いていることをティム以外には明かさず、しかも彼にも完成した作品しか見せなかった。しかしその詩には並ならぬ才能が感じられた。職業としては芸術の教師を目指していたオーネゾルクの文学的知識と芸術的な野心は、作家志望であったティムのそれより勝っていた。補習学校入学以前も、ティムが若者らしく夏の海辺で女の子たちと時間を過ごしている間、オーネゾルクはイギリスやフランスを旅し、季節労働者として働きながらその土地の言語や芸術について学ぼうと努めていた。外国旅行が現在のように普通のことではなかった時代である。以前はアメリカ文化に惹かれていたティムも、オーネゾルクを通してアイルランドやフランスの作家たちを知るようになる。ベケット、イエイツやオフラハティ、マラルメ、アポリネール、ヴェルレーヌやランボーである。そして二人は多くの本を同時に読み合い、感想を話し合った。ゴットフリート・ベンが自作の詩を朗読したレコードを、二人で暗記してしまうまで聴いた。またある時はホメロスの『オデュッセイア』を交代で朗読しながら読み進み、一週間もすると二人ともヘクサメター（六歩格）のドイツ語で自由に話すことができるようになったと言う。オーネゾルクがキューバや南米の詩をも読もうとしていることはティムを驚かせた。さらに彼はエズラ・パウンドの『ピザン・キャントウズ』に感化されて漢字の勉強さえ始めていた。彼のエッセイにグスタフ・ランダウアーの名が登場しても、ティムにはそれが誰のことか分からなかった。しかし二人の間には競争心のない友情があった。そして共通の知的好奇心と目標があった。

共に読んだ多くの書物の中で、「最も徹底して、そして頻繁に語り合い、そして最も長きに渡って二人を感動させた作品(F64)」が、このエッセイの後半のタイトルとなったカミュの『異邦人』である。当時のドイツの若者たちにとって、サルトルやカミュに代表されるフランスの実存主義は大きな魅力を持っていた。ティムの説によると、ユダヤ人やローマ人の民族殺戮に関わった父親たちの世代の精神性は、戦後になっても変わらなかった。彼らにとってそれらの罪は、行動に選択の余地がない状況で「ただ勇敢に、あるいは勤勉に戦った(F90)」結果だったからである。従順であるように育てられた彼らは、息子たちの世代にも同じ徳を要求した。服従、勤勉、秩序、義務感。家庭でもクラブでも、学校でも軍隊でも、法廷でも同じ調子であった。戦前のナチで、戦後に社会のエリートとなったいわゆる“エスタブリッシュメント”が、ティムの世代にとっては「占領軍であるかのように感じられた(F91)。」そして彼らに対する感情的で個人的な反抗に思想的な基盤を与えたのが実存主義であった。その脱目的な哲学は、美的なものであれ、道徳的なものであれ、社会的なものであれ、従来の規範の拒否を可能にし、その代わり不条理という一種の虚無の代償として個々の人間に自由と責任を与えた。団結して闘う唯一の理由があるとすれば、それは国家のためなどではなく、「死、苦しみ、抑圧に対抗するため」であり、しかも「あの世における正義」などではなく、「この世での自由な友愛の名においてしかあり得なかった(F92)」。因みに同じ時期、ベルリンのドゥチュケの周辺においてもサルトルやハイデガーが盛んに読まれ、彼も実存主義に「完全に魅了されていた」<sup>30</sup>と言う。旧世代の価値観や、ドイツの占領軍や対独協力者等の「ファシストたち」と戦ったフランスの若者と同様、帰ってきたナチスであった前世代に抵抗せねばならなかったことが、実存主義がイギリスと比べてドイツにおいてはるかに重要な意味を持った理由だとティムは分析している<sup>31</sup>。

ティムとオーネゾルクは『異邦人』を互いに朗読しあって読みながら、その魅力について語り

合った。慣習や情念に対する無関心、妥協や偽善や余計な意味付与の拒否、これらが二人を、そして当時の若者たちを魅了した。二人はムルソーがアラビア人を射殺した理由について話し合った。焼け付くような暑さとアラビア人の匕首に反射した太陽の光、それがムルソーを激高させた、というのがオーネゾルクの解釈だった。「ただの偶然。射殺も死も世界と同じく無意味なものだ。世界は世界が今あるままのものである。同語反復ではあるが、均衡の存在を意味する同語反復である。世界に超越などなく、天地創造も被創造物もない。人生は偶然でありその意味を解釈することはできない。(F66)」ティムも当時は同様に考えていた。そしてムルソーのような“無関心(indifférence)”が暫く青年ティムの基本姿勢となった。しかしオーネゾルク事件が起こると、彼の死とアラビア人の死、ムルソーの死刑とクラスが無罪という類似と相違の不条理が、ティムを憤慨させた。クラスは裁判において、オーネゾルクがナイフを持っているように見えたと言明し、正当防衛を主張した。しかし実際には他に誰もナイフを見た者など居なかった。オーネゾルクは枕カヴァーに自分で「テヘラン大学に自治を」と書いた手製の横幕を持っていただけで<sup>32</sup>、しかも射殺された時、無抵抗なまま3人の警官に殴打されていた(F114)。にも拘わらずクラスを無罪とした判決文は次のようなものであった。「ピストルの引き金を引くという行為が、制御不可能な、原告の意思によっても抑制できないような過ちに起因したという可能性を排除することはできない。(F92)」これはムルソーの殺人の理由と奇妙な符合をなす言分である。「しかしここでは国家が自らの権力=暴力<sup>ゲヴァルト</sup>を正当化し、警官を無罪にするために無意味な意味づけを強引に押し付けている。そのことがこの無意味さに対する憤激を一層大きくした。(F93)」怒りがティムの、そして多くの若者たちの“無関心”を凌駕していった。カミュがレジスタンスに身を投じたように、彼らも国家に対して反抗し、抗議した。オーネゾルクの死の三ヶ月後、ティムがパリからミュンヘンに戻ってみると「全てが変化していた。(F78)」義憤に駆られた議論やデモ等の行動が大学を支配していた。ティムも学生運動に身を投じることになるが、その運動の様子は彼の処女作である『暑い夏』が伝えている。

ブラウンシュヴァイクの補習高等専門学校に残るオーネゾルクに関する記録の中には、ティムが『友と異邦人』の中で全文を引用している三種の文書がある。まずはオーネゾルクが入学資格年齢に達する2年前から校長に宛てて書いていた二通の志望書である。最初の志望書において、オーネゾルクは自分が如何に芸術の理解に努めているかを伝えようとしている。自分で絵画や彫刻を制作し、美術館やコンサート、劇場や詩の朗読会を訪れていることを記し、「芸術のあらゆる分野において、僕は現代の創作に関する理解を深める努力をしています。(F16)」と結んでいる。この時彼はまだ19歳、「今日の間人が読んだら呆れるだろう」<sup>33</sup>ような懸命さである。しかし当時芸術鑑賞はまだ裕福な市民階級のもので、困窮した家庭の子弟は懸命な努力によってその敷居を乗り越えねばならなかった。翌年の志望書では、「一人の間人になるために(F18)」家を出て旅に出た先のイギリスやフランスでの芸術修行について報告した後、彼は次のように書いている。「人間とは何だろうかと僕は自問してみます。人間の価値については問う必要もないことです。しかしその使命を、自由であるという使命を、利己心や功名心から自由であり、“人間が人間にとって一人の援助者となる”ほどに自由であるということを、人は余りにも容易に諦めてしまいがちです。(F19)」ティムを感嘆させるのは、文体から読み取れる20歳そこそこの青年の決然たる率直さである。そして今思えば、ベルリンでのデモに参加したのも、彼にとって“人間が人間にとって一人の援助者となる”ための一つの道だったのだろう(F93)とティムは考える。

オーネゾルクを嫌う者はいなかった。彼は物静かではあったが、ウィットに富んだ発言で人を

印象づけた。余裕のない経済状況を託ったりすることは決してなく、嘘や誇張も彼には無縁のものだった。三番目の“オーネゾルク文書”は、入学試験の面接官であった心理学者による心理鑑定書であるが、ティムは30分の面接でその心理学者が以下のような正確な洞察を得たことに驚いている。「オーネゾルクは非常に感性豊かで、特に美的なものに関する強い感受性を持つ。彼は全体的に繊細な印象を与えるが、弱腰であるとか優柔不断であるのとは違う。彼は控えめで内向的な傾向を持ち、また美的なものに惹かれる傾向を持っているが、それは軟弱さとか活力のなさとは別物である。その生まれつきの資質から、緊張状態を持続させることは彼にとって常に容易とは言えないかもしれない。しかし彼は自己研鑽によって自分の今の次元からさらに高みを目指すというはっきりとした実効性のある動機を持っており、彼は確実にその望みを実現させるだろう。彼には十分な知性がある。発言するよりもしばしば熟考することの方が多だろうが、彼は物事の本質に対する感性を持っている。対人関係に関して言えば、彼は決して難しい相手ではない。時には恐らく身を引きがちになるかもしれないが、話し易く、人付き合いも求めている。彼は間違いなく非凡な人物になる徴候を持っている。(F124)」因みに、『ベンノ・オーネゾルクは如何にして死んだか?』の著者であるズークプによると、オーネゾルクのもう一人の親友であったエックハルト・Pも1999年にこの文書を読み、最後の“予言”も含めてその一文一文の完全な確さに、オーネゾルクが眼前に蘇るようだと言ったと驚いたと言う<sup>34</sup>。ティムはいつかオーネゾルクの作品が世に出ると信じていた。「非凡な人物になる」という鑑定が、政治的な場面で実現してしまったことは何かの「奇妙な間違い(eine merkwürdige Verkehrung) (F14)」としか思えなかった。なぜなら、ティムの知るオーネゾルクは政治には関心がなかったからだ。ティムの記憶の中では、オーネゾルクが政治の話をしたのは二度だけである。最初は62年の「シュピーゲル事件」の際、二度目はやはり同年、かつてのナチ党員で第三帝国時代に死刑判決を多く出した事で知られるヴォルフガング・フレンケルが連邦検事総長に任命された時だった。この時の自分たちの憤慨をティムはよく記憶している。しかしフレンケルだけが問題ではなかった。ニュルンベルク法の起草者の一人だったハンス・グロプケも首相府次官として戻って来たとし、1967年当時のベルリンの警視長官であり、反イラン国王デモの際、デモ参加者の逃げ場を塞ぎ、その首謀者たちを逮捕するための「腸詰め作戦」や「狐狩り」計画を立てたとされるエーリヒ・デューンズィングも第二次大戦時の参謀本部将校であり、騎士十字勲章の受拝者であった。第三帝国のエリートや官吏たちの多くが戦後も重要な地位を占めたことは、ティムに言わせれば「ドイツ連邦共和国誕生の際の先天性欠陥 (F88)」であった。クラスの無罪判決はスキャンダルであったと人は言うが、ティムにとってそれは国家の首脳部、特に司法の上層部が、かつてのナチによって支配された権威主義的でファシスト的な機構であったことの証左であった。そしてそのことに対する憤怒が学生運動を過激化させた (F121)。

『友と異邦人』は、ティムが自分の追想の行為を、冥府におけるオルフェウスの試みでもあった“呼び戻す(rappeler)”というフランス語の言葉で捉えているように(F172)、オーネゾルクを特定の個人として、つまり妊娠したガールフレンドと6週間前に結婚したばかりの全く非暴力的な青年であったばかりでなく、詩人として名を成すはずの「大変な才能の持ち主(extrem begabt)」<sup>35</sup>として取り戻すための悲歌であり、60年代のドイツの権威主義的な国家機構の不条理な犠牲者となった友のための鎮魂歌である。因みにこの作品はテレビ映画化され、2008年4月にベルリン・ブランデンブルク放送によって放映された<sup>36</sup>。

#### 4. 「ドイツの秋」の始まり

オーネゾルク事件は多くの人間を政治的に、あるいは過激にさせた。この事件の日付を冠したテロリスト・グループである「6月2日運動」を組織したラルフ・レインダースが「あの時、警官どもが我々全員を撃ったような気分だった」<sup>37</sup>と語り、「ツァイト(Die Zeit)紙」も「オーネゾルクの頭部に撃たれた弾丸は多くの人間の頭部にも撃たれた」と書いた通り<sup>38</sup>、一人の警官が一学生の後頭部に放った弾丸が彼らにとってトラウマのようになった。各地の大学でオーネゾルク追悼集会が開かれ、全西ドイツの4割の学生が参加したと言われている<sup>39</sup>。そこでは「今日はオーネゾルク、明日は我々」<sup>40</sup>、「オーネゾルクを無駄に死なせてはならない。彼の死によって我々は戦いの義務を負った！」<sup>41</sup>といったプラカードが見られた。ドゥチュケは三ヶ月後の9月5日、抑圧的な体制のシステムを破壊する機構としての「都市ゲリラ」宣言をベルリン自由大学において行い<sup>42</sup>、さらに同年末には、「我々自身の暴力を最初から諦めてはならない、それはシステムによる組織された暴力を黙認するに等しいからだ」<sup>43</sup>という彼のインタビューでの言葉が広まるようになる。左翼系の雑誌「コンクレート」の記者であったウルリーケ・マインホーフも「対抗暴力」について書き始め<sup>44</sup>、クラスの裁判の際にオーネゾルク家の代理人となった弁護士ホルスト・マーラーも武装による社会活動を考えるようになっていった<sup>45</sup>。そして過激派の中で実際に武器の購入と使用が検討され、実行に移されていく<sup>46</sup>。

「オーネゾルク事件なくしてRAFは存在しなかった」<sup>47</sup>と言われている。日本ではあまり知られていないその経緯は、『バーダー・マインホーフ・コンプレックス』の著者であるS. アウストラによると次のようであった。オーネゾルク殺害の夜、憤慨して対策を協議していた社会主義ドイツ学生同盟(SDS)の事務所で、「このファシストの国家は我々皆を殺そうとしている。抵抗運動を組織しなければ、暴力には暴力を以て答えるしかない。アウシュヴィッツの世代とは話し合いなど出来ない！」と泣いて訴えたのは、後にRAFを組織するグードルン・エンスリンである<sup>48</sup>。翌日の6月3日、ベルリン市内でのデモとプラカードや横断幕の使用が禁止された<sup>49</sup>。学生たちはT-シャツに抗議文を書いたりする政治ハプニング(Polit-Happening)という形で抗議活動をするしかなかった。そのようなハプニングに好んで参加したのが、政治的な自称芸術家集団である「コムーネ1」の周辺にいたアンドレアス・バーダーである。バーダーとエンスリンは多くの学生デモの主催母体であったSDSのメンバーではなく、バーダーは学生ですらなかった。彼は政治的な議論が嫌いで「誰でもない奴」と呼ばれながらも革命に憧れており<sup>50</sup>、デモの代替物である政治ハプニングに活動の場を見出した。彼はそこでエンスリンと出会い、SDSや「コムーネ1」とは独立して抵抗のハプニングを続行することになる<sup>51</sup>。それがフランクフルトでのデパート放火事件である。逮捕された彼らの裁判の際、被告の弁護人となったマーラーと、「コンクレート」の取材のために獄中のエンスリンを訪れて彼女と意気投合したマインホーフが結果的に“集結”し、RAFの“幹部”が誕生するのである<sup>52</sup>。そして70年に起きたバーダーの脱獄幫助によってマインホーフが非合法の側に身を投じた時、彼女によって発表された事実上のRAF宣言にも「撃つ(schießen)」という動詞が使われている。「制服を着た人間は血も涙もない。(…)このような人間たちと話すことなどがそもそも間違っている。そしてもちろん我々も銃を使い得る(kann geschossen werden)。」<sup>53</sup>「共和国を変えた」と言われる1967年6月2日は、10年後に起きる「ドイツの秋」の始まりでもあった。

その後のRAFの活動については既に多くの言及があるが、RAFが1998年に活動を停止するまでRAF側の29名を含めて計72名の死者と<sup>54</sup>2億5000万ユーロに及ぶ物損総額を出し<sup>55</sup>、過激派条

例のような法律も生まれるに至ったことを考えると、その起点であるオーネゾルク事件を「ドイツ連邦共和国の歴史における最大の過ち」と捉える声があるのも頷ける話である。

##### 5. 「偶然に死んだのではないオーネゾルク」

しかし“68年”に関する議論で往々にして忘れられていることがある。過激派の暴力には国家の権力=暴力が先行していたことである。『友と異邦人』の中では『異邦人』の中のアラビア人のように「偶然に死んだ」とされるオーネゾルクであるが、実は当時の連邦裁判所内では「オーネゾルクは偶然に死んだのではない」と言う声があった<sup>56</sup>。当時西ドイツにとってイランは政治的にも経済的にも重要な利害が集中する国であり<sup>57</sup>、その国王夫妻の訪独に際して連邦内務省は最高レベルの保安体勢を要求していた<sup>58</sup>。そもそもベルリン市警視長官らは67年以前から、学生との衝突を戦争のレトリックを使って「学生戦争」と呼んでいたが<sup>59</sup>、特に6月2日にはイラン国王の身に危害が及ばぬよう、デモ参加者を国王から遠ざけ、彼らに大きな損害を与えて将来のデモに対する気概を挫くよう、様々な計画や命令が存在していたと言われている。上述の「腸詰め作戦」や「狐狩り」計画もその例であるが、その他にも百台もの救急車を準備して学生たちを殴打すべしという指令が事前にベルリン市警に出されていたらしい<sup>60</sup>。また、サヴァクがその核であったと言われる「熱狂的イラン人(Jubelperser)」を何処かの“当局”がベルリン市長の与り知らぬ間に西ベルリンに“入国”させ、ベルリン市警がデモの中心地まで先導してデモ参加者たちを棍棒で痛打するに任せた事実などからしても<sup>61</sup>、この日のデモが騒乱状態となるシナリオは事前に存在していたのである。ハノーファー大学の社会学の教授で、連邦内務省の委託を受けて学生運動とテロリズムの分析を行ったフリッツ・ザックによると、“当局”とベルリン州内務省および警察が行ったことは「危険回避の予防措置としての違法な暴力」<sup>62</sup>であった。オーネゾルクの死は計算外であったにせよ、権力機構の一つである警察の、暴力を前提とした行動の結果として起きたことであった。しかしいくつかの証言があったにも拘わらず、上記のシナリオが何処で書かれ、どのような経路で伝達されたのか、ベルリンの議会内調査委員会においてもオーネゾルク裁判においても説明はされていない。

「6月2日運動」のメンバーも、「この日付が常に喚起する事実は、最初に撃ってきたのは彼ら（警察）だったということだ」<sup>63</sup>と語っているが、RAFのメンバーに対しても警察は容赦がなかった。彼らは警察から逃走しようとしただけで射殺された。ハインリヒ・ベルはこのような警察の過剰反応を批判し、有名な「シュピーゲル」への投稿記事、「ウルリーケは恩赦もしくは身柄保護を欲しているか？」<sup>64</sup>の中で、彼女を射殺するのではなく、「身柄を保護」、つまり逮捕して裁判を受ける権利を与えるべきだと指摘した。本来RAFが考えていた攻撃目標は個人ではなくて連合軍やシュプリンガー社の建物だったが、身内のペトラ・シエルムが警察側も含めて最初の犠牲者となった後は、警察との報復合戦のような暴力の連鎖となってしまった。「コムーネ1」を解体して過激派グループ「トゥパマロス・西ベルリン」を結成したディーター・クンツェルマンも次のように語っている。「都市ゲリラに関する議論の中でいつも忘れられていることがある。(…)地下に潜伏した者たちは、地下に追い込まれたのである。この点では左派の暴力のみではなく、体制側にも同じように責任がある。ただ、後者の責任の方がずっと大きかった。なぜなら彼らは本物の国家権力=暴力<sup>グワァルト</sup>を手にしていただけだからだ。国家による暴力の占有である。そして常にあらゆる暴力から距離を取るように我々を仕向けながら、自分たちは毎日のように暴力を行使していたのだ。」<sup>65</sup>実際多くの警官がすぐに銃に頼った。当時の特別部隊の一員が語るように、「今や最初に



ベンノ・オーネゾルクの新たな追悼に向けて ―シュタージ文書の発見・ウーヴェ・ティムの『友と異邦人』・ドイツの“68年”と暴カー撃った者が生き残る<sup>66</sup>という状況が生じていた。

しかし現在行われている“68年”の議論の中で、国家の権力=暴力<sup>ゲヴァルト</sup>を問題視する声は少ない。ただ、かつてベルリン自由大学の法学部の教授で副学長も務めたウーヴェ・ヴェーゼルの著書『挫折した革命』<sup>67</sup>の中で、F.ザックの分析に拠りながら国家権力の行き過ぎを批判している。連邦内務省が出版に躊躇したという<sup>68</sup>F.ザックの報告書は、「市民の暴力はタブー視され、政治的暴力はただの“病気”として捉えられ、国家の暴力は“治癒力のある薬”であり倫理的な行為として正当化されているが、この3つが同時に起こると本来そこに内在している不条理によって暴力の増大が生じる」<sup>69</sup>という考察から始まり、「社会的運動との政治的・国家的な交渉(Auseinandersetzung)は、政治的なオプションと機会を如何に与えるかにかかっている」<sup>70</sup>と説くものである。彼によると“68年”は、公的な機関が過剰な暴力を行使し、それを罰することなく放任した国家の政治的な失敗であり、その顕著な例がオーネゾルク事件であった<sup>71</sup>。ヴェーゼルはさらに論を進め、政府はH.M.シュライアーとRAFの受刑者の交換提案に応じるべきであった、あれだけ多くの死者を出すに値する国家理性など過ぎた時代の遺物である、と主張している<sup>72</sup>。このような意見は少数派ではあろうが、RAFが第二・第三世代を生み、1998年まで報復活動を続けたこと考えると、一考の価値があるようにも思われる。

## 6. “68年”のさらなる解明に向けて

ベルリンは冷戦の前線地帯であり、東ドイツが学生運動の成り行きに大きな興味と利害を持っていたことは知られている。西ベルリンにはシュタージのスパイや情報提供者が多く居り、SEDによる扇動活動が行われていた<sup>73</sup>。東側の力がボンにも及んでいたことは有名なギョーム事件やブランド首相の不信任投票の際のSEDによる連邦議員の買収事件等が物語っているが、T.アウアーバッハによると、シュタージは西ドイツに「特別出動隊」としての機能が可能なほどの組織を送っており、その計画には特定の人間の暗殺も含まれていたと言う<sup>74</sup>。オーネゾルクの殺害者であるクラスはシュタージから金銭や武器は受け取っていたが、デモ参加者の殺害指令を受けていたという証拠はない<sup>75</sup>。ドゥチュケを狙撃した犯人である東独出身のヨーゼフ・バッハマンもシュタージの送った非公式協力者ではなかったかという疑問が存在しているが<sup>76</sup>、やはりその証拠はない<sup>77</sup>。

しかしスパイを送っていたのは東ドイツのみではなかった。ギョーム事件の際にギュンター・ギョームとその妻の交換対象となった西側のスパイたち(Agenten)がいたわけだが、自国の学生運動家の間に多くのスパイや扇動工作員(Agent Provokateur)を送っていたのはベルリン州内務省に属するベルリン州憲法擁護局である。その最も有名な工作員であるペーター・ウアバッハは「コムーネ1」に近づき、ドゥチュケや過激派に火炎瓶や爆弾、銃等の提供も行っていたことが指摘されている<sup>78</sup>。ウアバッハの次に名の知られたウルリッヒ・シュミュッカーは「6月2日運動」の中から憲法擁護局のスパイ兼工作員となり、その後殺害された。彼の殺害には憲法擁護局の関与が指摘されながらも、その裁判は審議中止となったままである<sup>79</sup>。工作の指令の源はベルリン州内務省だとも言われているが<sup>80</sup>、工作の理由は未だに明らかにされていない<sup>81</sup>。F.ザックは憲法擁護局の扇動・スパイ活動をも批判して、そのような社会的な制御の試みは「副作用としての高い代償を払うことになる」<sup>82</sup>と述べている。

西ドイツの体制が“不条理な”判決文を書いてまで自らのシステムの一員として擁護しようとした警官クラスが、実は東ドイツの体制に奉仕していたことが今日明らかになったわけであるか

ら、クラスは西ベルリンの警官として、またシュタージのスパイとして、二重の国家権力<sup>ゲヴァルト</sup>=暴力を帯びていたことになる。彼の権力を帯びた違法行為は今度は罰を受けるのだろうか。そして歴史は彼を二重の意味でファシスト的と呼ぶだろうか。いずれにせよ、歴史家のクラウスハールやアウストが言うように、“68年”には未だに解明すべきことがある。オーネゾルクの射殺には指令が存在したのか、東ドイツの国家保安省はどの程度まで西側への影響力を持っていたのか、「熱狂的イラン人」の入国と行動を許可したのは誰なのか、ベルリン州内務省の扇動工作の理由は何だったのか。これらの疑問が解明され、「68年当時」に起きたことの連関を理解できなければ、ドイツ連邦共和国の歴史を理解することはできない<sup>83</sup>とクラウスハールは言い、アウストは「学生運動のみならず、テロリズムや国家保安省に関する歴史的考察の転換点が来ている」と語る<sup>84</sup>。

前述のM.ブーバックの著書は、父親暗殺の真犯人であるヴェレーナ・ベッカーが刑事捜査局の情報提供者となったために検察側によって秘匿されたのではないかという疑問を呈していたが、事件の再調査の結果、ベッカーが2009年の8月に再逮捕され、しかも彼女が連邦憲法擁護局の非公式協力者であったことも判明した<sup>85</sup>。少なくともブーバック事件は事件後30年以上を経て徐々に真相解明に近づいているようである。

しかし彼らの解明を求める行為は、歴史的究明や司法の誤謬の修正のみが目的ではあるまい。それはハーバースマスにとっての市民的不服従について西永亮が言うような、「現実には生じる合法的な不正を絶えず問題化し、民主的法治国家の未完成を際立たせることによって、逆説的ながらも、民主的法治国家とそれを枠づける憲法原理のより十全な実現を目指す」<sup>86</sup>行為に繋がるものである。そしてそのような市民的不服従こそ、“68年”全体の運動の中で暴力に関わる経験が中心的位置を占めてしまう<sup>87</sup>まで、シット・インやティーチ・イン、さらには「散歩デモ」や「ブディング攻撃」といったかたちで学生たちが本来行っていた行動ではなかったろうか。

ティムは今回のシュタージ文書の発見の後、『友と異邦人』の第二版に補遺を加筆するだろうと語っている<sup>88</sup>。それはオーネゾルクへの新たな追悼の辞となるであろう。また、発見されたシュタージ文書からスパイとしてのクラスの働きぶりを読み解いた書物が、既に2009年10月に出版されている<sup>89</sup>。“68年”における民主的法治国家の未完成を冷戦構造における文脈の中で捉え直すという未完の検証が、ドイツではこれからも続いていくのであろう。

1 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 22.05.2009: Ein Stasi-Mitarbeiter erschoss Benno Ohnesorg.

2 ヴェルト紙のインターネット版は10月6日にこれを“今年最大のニュース”であると報じている。Vgl. Die Welt, 06.10.2009: Solide und schnell: Das erste Buch zum Spitzel-Fall Kurras.

3 Helmut Müller-Enbergs/Cornelia Jabs: Der 2. Juni 1967 und die Staatssicherheit. In: Deutschland Archiv, 28.05.2009, S.395-400. この報告によると、クラスは1955年に東独への移住を申請したが、許可される代わりにスパイとしての職を提供された。1964年にはSEDへの入党を認められ、1967年まで優秀なスパイとして活動したが、事件以降はその任を解かれている。

4 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 25.05.2009: Kurras gesteht IM-Tätigkeit.

5 ZDF Sendung *Heute*: 29.05.2009: Bundestag lehnt Stasi-Check ab.

6 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 27.05.2009: Birthler verteidigt Arbeit ihrer Behörde.

7 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 23.05.2009: Strafanzeige gegen Ohnesorgs Todesschützen.

8 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 30.05.2009: Stasi-Auftrag an Kurras?

9 それは1967年頃から1977年の「ドイツの秋」までの一連の事件に至る過程(ゲルト・ケーネンが『赤い10年間』と呼んだ期間)をも意味する。Vgl. Gerd Koenen: Das rote Jahrzehnt. Köln 2001.

10 »Baader-Meinhof-Komplex«はドゥチュケやRAFのマインホーフと親交があり、「シュピーゲル紙」の編集長を勤めたシュテファン・アウストによる同名の著書に基づいて製作されている。日本では「バーダー・マイン

- ホフ：理想の果てに」として2009年の夏に公開された。
- 11 RAFに関する映画やテレビ用ドキュメンタリーは、「秋のドイツ」を始め、以前も多く制作されているが、国際的な市場に出る物は多くはなかった。
  - 12 Uwe Soukup: Wie starb Benno Ohnesorg?: Der 2. Juni 1967. Berlin 2007.
  - 13 例えばこの時連邦首相となった68年世代のゲアハルト・シュレーダー、内務大臣のオットー・シリー、緑の党の連邦議会議員となったハンス・クリスティアン・シュトレベレらは弁護士としてオーネソルク家の代理人、あるいはRAFのメンバーの弁護人を勤めていた。ドイツ国籍でありながらパリの5月革命の立役者となったダニエル・コーン・ベンディット(バンディ)はヨシユカ・フィッシャーの盟友として「緑の党」に参加し、1994年からはヨーロッパ議会の議員となっている。
  - 14 井関正久『ドイツを変えた68年運動』(白水社).2005, 142-145頁.
  - 15 井関正久:「西ドイツにおける抗議運動と暴力」In:「日本比較政治学会年報」第9号.2007, 117-197頁.
  - 16 Koenen: Das rote Jahrzehnt, S.20
  - 17 井関正久「西ドイツにおける抗議運動と暴力」, 191頁.
  - 18 井関正久「ドイツにおける「68年」論争の展開:40周年を迎えて何が問題となっているのか」In:「国際関係学研究」No.35. 2008, 35-45頁.
  - 19 この提案はドイツ・オペラ座の反対に会い、未だに実現していない。
  - 20 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 22.05.2009: Warum starb Benno Ohnesorg?
  - 21 Anne Siemens: Für die RAF war er das System, für mich der Vater: Die andere Geschichte des deutschen Terrorismus. München 2007.
  - 22 編集者のA.ズィーメンズはこれらのインタビューを題材にしてテレビ用のドキュメンタリー番組「誰が君たちに殺人の権利を与えた?」を製作している。
  - 23 Carolin Emcke: Stumme Gewalt: Nachdenken über RAF. Frankfurt a.M. 2008.
  - 24 Michael Buback: Der zweite Tod meines Vaters. München 2008.
  - 25 Uwe Timm: Der Freund und der Fremde. Köln. 本文中の略号Fに続く引用頁は以下の版に拠る。Ders.: Freund und der Freund. München (DTV) 2007.
  - 26 Timm: Heißer Sommer. Köln 1974.
  - 27 Timm: Die Entdeckung der Currywurst. Köln 1993.
  - 28 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 24.09.2005: Geschichte einer Ikone.
  - 29 “五分五分だ” という意味で、ゴットフリート・ベンの詩の題名から採られている。
  - 30 Gretchen Dutschke: Wir hatten ein barbarisches, schönes Leben: Rudi Dutschke. Köln 1996, 2007, S.38.
  - 31 Rhys W. Williams: 'Selbstdeutung und Selbstfindung': Gespräch mit Uwe Timm. In: David Basker(Hg.): Uwe Timm II. Cardiff 2007, S.21; Uwe Timm: Der Freund und der Fremde, S.91.
  - 32 Soukup: Wie starb Benno Ohnesorg?, S.24.
  - 33 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 24.09.2005: Geschichte einer Ikone.
  - 34 Ibid., S.139.
  - 35 Rhys W. Williams: 'Selbstdeutung und Selbstfindung', S.21.
  - 36 RBB Sendung »Der Freund und der Fremde«: 17.04.2008.
  - 37 Ralf Reinders/Ronald Fritsch: Die Bewegung 2. Juni. Berlin 1995. S, 18.
  - 38 Zit. Nach Soukup: Wie starb Benno Ohnesorg?, S.162.
  - 39 Ibid., S.242.
  - 40 Norbert Frei: 1968: Jugendrevolte und globaler Protest. München 2008, S.76.
  - 41 ZDF, Sendung ASPEKTE: 22.05.2009.
  - 42 Uwe Wesel: Die Verspielte Revolution. München 2002, S.183.
  - 43 Aust: Der Baader Meinhof Komplex. Neuausgabe. Hamburg 2008, S.71
  - 44 Ibid., S.103.
  - 45 Karin Wieland: a. In: W.Kraushaar/J.P.Reemstma/K.Wieland: Rudi Dutschke Andreas Baader und die RAF. Hamburg 2005, S.78.
  - 46 Reinders/Fritsch: Die Bewegung 2. Juni, S, 54ff.
  - 47 Soukup: Wie starb Benno Ohnesorg?, S.242; Frankfurter Allgemeine Zeitung, 04.06.2007: Polizei legt Kranz für Ohnesorg nieder.
  - 48 Aust: Der Baader Meinhof Komplex, S.83.
  - 49 このデモ禁止令はホルスト・マラーの訴えにより憲法違反と判断され、翌年撤回された。
  - 50 Wieland: a, S.67.

- 51 Aust: Der Baader Meinhof Komplex, S.83-86.  
 52 Ibid., S.107,112.  
 53 Ibid., S.40.  
 54 Wesel: Die Verspielte Revoltion, S.189.ただし未解決の事件を含むためか、この数には書物によっていくらか幅があるようである。  
 55 井関正久「西ドイツにおける抗議運動と暴力」、196頁。  
 56 Soukup: Wie starb Benno Ohnesorg?, S.245.  
 57 例えば当時西ドイツはイランに武器を輸出しており、また原子力発電炉の輸出市場も開拓しようとしていた。結果として西ドイツは1976年、イランに2基の軽水炉を建設する。Vgl.三島憲一『戦後ドイツ:その知的歴史』(岩波書店)1991, 137頁; 井出野栄吉「原子力発電と核拡散問題」In:「一橋大学研究年報.商学研究」No.28.1988, 3-54頁。  
 58 Fritz Sack/Heinz Steinert (Hg.vom Bundesminister des Innern): Protest und Reaktion. Obladen 1984, S.146.  
 59 Ibid., S.143.  
 60 Soukup: Wie starb Benno Ohnesorg?, S.245f; Sack/Steinert: Protest und Reaktion, S.181.  
 61 Sack/Steinert: Protest und Reaktion, S.171.  
 62 Ibid., S.170.  
 63 Reinders/Fritsch: Die Bewegung 2. Juni, S, 7.  
 64 Heinrich Böll: „Will Ulrike Gnade oder freies Geleit?“. In: Der Spiegel. 10.01.1972, S.54-57.  
 65 Langguth: Mythos '68: Die Gewaltphilosophie von Rudi Dutschke - Ursachen und Folgen der Studentenbewegung. München 2001, S.127.  
 66 Aust: Der Baader Meinhof Komplex, S.329.  
 67 注42参照。  
 68 Wesel: Die Verspielte Revoltion, S.266.  
 69 Sack/Steinert: Protest und Reaktion, S.141.  
 70 Ibid., S.367.  
 71 Ibid., S.368.  
 72 Wesel: Die Verspielte Revoltion, S.257-267.  
 73 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 24.06.2009: „Ein sehr bedauerlicher Unglücksfall“; Wolfgang Kraushaar:1968 als Mythos, Chiffre und Zäsur. Hamburg 2000. S.139ff; Langguth: Mythos '68, S.201-204; 井関正久「旧東西ドイツの「1968年」」In:「歴史研究」No.768. 2002, 130-131頁。  
 74 Thomas Auerbach: Einsatzkommandos an der unsichtbaren Front: Terror- und Sabotagevorbereitungen des MfS gegen die Bundesrepublik Deutschland. Berlin 1999, S.24ff; ミュラー=エンベルクス/ヤープスの論文(注2)は1955年のザールラント州首相暗殺未遂事件を挙げている。  
 75 Müller-Enbergs/Jabs: Der 2. Juni 1967 und die Staatssicherheit, S.398f.  
 76 ZDF Sendung *Heute*: 26.05.2009: „Stasi wollte 68er-Bewegung kaputt machen“.  
 77 ZDF Sendung *Heute*: 26.05.2009: Kein Stasi-Akten über Dutschke-Attentäter.  
 78 Koenen: Das rote Jahrzehnt, S.59, 128, 173f; Wolfgang Kraushaar: Rudi Dutschke und der bewaffnete Kampf. In: Kraushaar/Reemstma/ Wieland: Rudi Dutschke Andreas Baader und die RAF, S.23; Ders.: Achtundsechzig: Eine Bilanz. Berlin 2008, S.249.  
 79 Aust: Der Lockvogel. Reinbeck bei Hamburg 2003.  
 80 Aust: Der Baader Meinhof Komplex, S.247; Soukup: Wie starb Benno Ohnesorg?, S.270.  
 81 Koenen: Das rote Jahrzehnt, S.59; Kraushaar: „Die altgenossen hören manche Sachen nicht gerne“. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung, 05.07.2008.  
 82 Sack/Steinert: Protest und Reaktion, S.366.  
 83 Kraushaar: „Die altgenossen hören manche Sachen nicht gerne“.  
 84 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 23.05.2009: Der Schuss, der die Republik veränderte.  
 85 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 03.09.2009: Verena Becker erhielt Geld.  
 86 西永亮「ハーバースの市民的不服従論: デモクラシーと法治国家の内的連関に関する一考察」In: 飯島昇蔵, 川岸令和編『憲法と政治思想の対話: デモクラシーの広がり深まりのために』(新評論)2002, 226頁。  
 87 Kraushaar: Achtundsechzig, S.90.  
 88 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 23.05.2009: Es wäre trotzdem zur Protestbewegung gekommen.  
 89 Armin Fuhrer: Wer erschoss Benno Ohnesorg?: Der Fall Kurras und die Stasi. Berlin 2009.